

私批評と人物評論

——一九三〇年前後の文芸批評にみる人称消費の構造——

大澤 聡

0. 課題の設定

本発表では、1930年前後の日本の文芸批評を〈人称〉という問題関心から分析していきます。具体的な対象は、それぞれ「私批評」「人物評論」と呼ばれた批評様式です。異なる文脈から同時期に、論壇・文壇ジャーナリズムで隆盛したふたつのスタイルをつきあわせ、当時の批評環境を総合的に捉えかえすことに目的が設定されています。

1. 同時代的観察

杉山平助が「氷川烈」名義で書いた「文芸評論家群像」（『新潮』1932年11月号）という論説を参照しておきます。そこで杉山は次のようなことをいっています。すなわち、「小林秀雄」は同時代の「大宅壮一」と機能的に等価な文壇的位置に存在している、と。大宅は、1920年代後半のプロレタリア文学の勃興期に「階級理論一点張り」を貫くことで、既成の文壇の「標準」をことごとく瓦解させた。他方、小林の機能は、この大宅の機能をそっくり反転させることで説明できるというわけです。つまり、小林は「社会的情勢」や「階級理論」を等閑視することで、「人間といふものについて比較的老成した分析力」を発揮し、新たな批評性を獲得した。

ここからは、当時、大宅と小林を並列することにある種のリアリティがあったのであろうということがうかがえます。今日の批評史というスケールにおいて見るかぎり、杉山は一見、非対称的な存在を並列的に扱っているように見え

る。しかしながら、当時、両者を並べることはさほど違和感のない行為だった。このことは、拙稿「大宅壮一と小林秀雄——批評の「起源」における複数的可能性」(仲正昌樹編『歴史における「理論」と「現実」』御茶の水書房、2008年)において、実証的に分析しておきました。本発表では、それとは異なる論点から議論を展開したいと思っています。すなわち、大宅は「人物評論」の名手としてテキストを量産した。他方、小林は「私批評」と呼ばれる批評様式を確立した。そして、それらは完全に同時代のことであった。この並列の意味するところを考えてみたいと考えています。

2. 「私批評」という様式

「私批評」の方から見ていきます。まず、用語の由来の確認をしておきましょう。青野季吉「現代文学の十大欠陥」(『女性』1926年5月号)が既成文学をマルクス主義的な視座から批判したことに対して、正宗白鳥「文芸時評」(『中央公論』1926年6月号)が再批判しました。その際、白鳥は次のようなことを記しています。「何時の世にも通じさうな空疎な批評学といふやうなものから割出された」身振りである、と。公式適用の「空疎」さを指摘したわけです。

続けて、白鳥は「批評家の実感」「批評家の体験」に即した批評スタイルを対置し、それを「私批評」と呼びます。このあたりが「私批評」という用語の初出であろうと思われます。『文芸用語の基礎知識』(『国文学解釈と鑑賞』1988年11月臨時増刊号)所収の「私批評」の項(曾根博義執筆)も、これを「私批評」の初出と推定しています(なお、同解説によれば、当該用語はその後、「文壇用語」として定着したとはいいいがたい)。初出ではないにせよ、両者の議論がいわゆる「文芸批評方法」論争へと発展していくなかで、あらためて認知された用語だったといってよいと思われます。

これと全く同じ構図が数年後に、小林秀雄と三木清のあいだで反復されます。マルクス主義的な立場にあった三木が論説「新興美学に対する懐疑」(『文藝春

秋』1930年4月号)のなかで、自らの批評を「科学的」と述べた。それを小林が批判しているのですが、そのときにこうもいっています。あまりに有名な言葉なのですが、やはり導入として適切なので引用しておきます。「批評するとは自己を語る事である、他人の作品をダシに使って自己を語る事である」。マルクス主義的な批評は、作品を客観的に分析するのが特徴であり、それはとりもなおさず、「私」性を駆逐するものである。それに対して、小林は「自己を語る」ことを重要視したわけです。分析ではなく自己表現として、批評行為をとらえる。1930年前後に、マルクス主義的な批評形式に対抗するかたちで、「私批評」という様式が立ちあがります。

この対立図式をもう少し見ておきましょう。たとえば、大宅壮一は「文芸批評の欠陥(一)」(『東京朝日新聞』1932年6月23日朝刊)という記事のなかで、批評家をふたつのタイプに区分しています。「結論的」な「直球的批評家」と、「過程的」な「曲球的批評家」です。言うまでもなく、大宅自身はプロレタリア文学系統であり、前者に属します。そして、小林のことを後者だと見る。そのうえで、後者のスタイルを「肝腎の答へをはつきり示さない」と批判します。

これに対して、小林秀雄は「同人雑誌小感(三)」(『東京朝日新聞』1932年7月15日朝刊)という記事(同時期の同じ媒体の同じ欄であること自体、両者が同一空間に並存したことを象徴している)のなかで揶揄的に応答しています。すなわち、「理窟好きな批評家は、一流作品も死物と仮定して、その上で兎や角理窟をいひたがる。ところで眼前の作品がはじめから死物だとすれば、随分手間がはぶけて都合がよろしい。などといふのは、大宅氏のいはゆる曲球批評ですか」と。マルクス主義的な批評は作品を公式にあてはめ、レッテルを貼りつけていく。そうした行為は、とりもなおさず、対象を「死物」と化してしまうだろう。なぜなら、概念を貼りつけた瞬間、すでに「結論」は決定してしまっているのだから、というわけです。そこには、「私」の介在する余地がない。それゆえ、小林の批評対象にはなりえない。「作品といふ生き物」という表現を小林は使用していますが、「作品」と「私」の格闘こそが「批評」なのだと主張

します。

こうした小林の批評観に対しては、当時から多くの批判が存在していました。青野季吉「批評の三典型」（『東京朝日新聞』1931年5月30日朝刊）は、小林の文章を「内部的の論理といったものは、貫徹してゐるが〔、〕外部的、説明的の論理的展開などはまるでない」と指摘することで、「現象批評」的観点の欠落を批判しています。また、小林批判の急先鋒だった矢崎弾は、論説「小林秀雄を嘔み砕く」（『三田文学』1934年2月号）のなかで、「現象を割りきつて」といると指摘します。そして、「私小説に対応する私批評である」と述べる。つまり、「私批評」という用語は、ここでは蔑称として使用されている。このように、大半の小林批判は、小林が対象を重視していない点を批判しています。記述されるのは、「対象」か、それとも「私」かで議論が断裂している。

小林の文壇デビューが1929年であるということを考えると、登壇後すぐに批判対象となったことがうかがえます。痛烈に批判されたことの背景として、それだけ看過しえない状況にあったことを押さえておく必要があります。多くの読者に受け入れられていたことの証左として、小林の影響圏で批評を展開した人物が大量に発生した事実をあげることができます。ここでは、典型例として深田久彌を見ておきましょう。

深田は、論説「批評の公平について」（『文藝春秋』1932年11月号）のなかで、「批評の当否を気にするのは作家だけで、読者はむしろ批評家のものの云ひ方に興味を持つものだ」と言っています。作品評の当否ではなく、その手つきにこそ意味があると見る。もちろん、一般的に必ずしもそうはいえないわけですが、深田はそうした信念のもとで批評を書いている。先ほどの「対象」／「私」の区分でいうと、あきらかに「私」を重視しており、小林の系譜に位置する。さらに、別の記事「私評論の説（上）」（『読売新聞』1934年1月23日朝刊）では、「私評論」といふ言葉を思ひついた」と述べています（以前からこの言葉はあったのですから、もしかすると用語自体があまり浸透していなかったのかもかもしれません。あるいは、深田はここで、より私秘的経験を暴露するような批評

文を指しているのかもしれませんが)。私批評の系譜を自認していることが分かります。

深田のような例は他にも多くあげることができるわけですが、それらが小林エビゴネンであるということは、文壇的な共通理解だったようです。春山行夫はこういっています。「人々が彼 [= 小林秀雄] の進路を追跡することはこのあたりで中止すべきである」、と。これは、小林がドストエフスキー論に着手すると、すぐに陸続とドストエフスキー論が発生し、流行してしまったという現象を批判した言葉です。そのとき、「深田久彌」や「雅川滉」のことを、「犠牲」とまで記しています。深田や雅川のほかに、古谷綱武なども、小林の圧倒的な影響下で批評文を精力的に発表しています。

さて、以上を簡単にまとめておきます。1920年代に文壇を席卷したマルクス主義系あるいはプロレタリア文学系の批評は、作品を社会現象に還元することで、分析の新しさを示しました。それに対して、小林ら私批評の書き手たちは、個々の作品の単独性を掬いとる志向性を重視します。さらにいうと、そういった個性を感知しうる「自分の精神機構の豊富性」を顕示した。すなわち、語られるべきは「私の心」= 自意識であると主張するわけです（カッコ内はいずれも、小林秀雄「アシルと亀の子」『文藝春秋』1930年4月号）。

「私」の一回的な自意識を表現するとなると、独自の言葉や文体の創出が要請され、最終的に、対象から自立した作品として批評が流通することになる。であるがゆえに、模倣者が次々と発生する。ここに、批評主体（つまり「私」）の前景化を見てとることができるわけです。それは、記述の構造においても受容局面においても、ともにいえる。

3. 「人物評論」という様式

次に、「人物評論」について見ていきます。まず、「人物評論」の形式的特徴について簡単に整理しておきましょう。当然、「人物」が対象となるわけですが、当時の用例から見て、この「人物」という語彙には、複数の意味が畳み込れて

いたであろうと考えられます。すなわち、広義には、思想やテキストではなく人間存在を対象とした評論であるということ。狭義には、とりわけ傑物や大物を取りあげた評論であるということ。ですので、さしあたっては、佐々弘雄「分らない偉人」（聞人会編『世界を描く』立命館出版部、1935年）が定義したように、「人物とは、取柄のある人間と云ふ位の意味」にとっておけばよいでしょう。

人物の帰属ジャンルについては領域不問であり、政治家や学者をはじめとして、様々な著名人が取りあげられる。もちろん、文学者も取りあげられる。作家論も場合によっては人物評論に接近します。また、フォーマットとしては、①単体評型（「××論」）、②並列評型（「××と○○」）、③列伝体型（「××オン・パレード」「××総まくり」「××に躍る人々」「××のぞ記」「××の陣営」）などの定型が析出できます。

人物評論という様式自体は、明治期からすでに存在し、何度かジャーナリティックな流行を見せるのですが、本発表が分析対象に設定している1930年代前半にも、ひとつのブームをむかえています。先述したように、大宅壮一は多くの人物評論テキストを発表したわけですが、その大宅が1934年に「人物論の構成」（前本一男編『日本現代文章講座 第六巻―指導篇』厚生閣、1934年）という文章のなかでこういっています。「まさに今日は人物論時代だとさへいへるであらう」、と。それほどに、人物評論が雑誌ジャーナリズムの主軸になっていた。象徴的な事例としては、この時期に、大宅が『人物評論』（1933年3月―34年3月）というタイトルの雑誌を主催刊行していたことがあげられます。

当時の人物評論の有力な書き手としては、ほかに、馬場恒吾、阿部真之助、杉山平助、佐々弘雄などを拾うことができます。杉山以外の3人は政治評論家として活躍しており、そのため、実際に書くものも政治家の人物論が大半を占めます。その背景には、普通選挙の実施以後、政治家が一般読者の興味の対象に入ってきたときに、それを紹介する記事が広く求められたという経緯があったと想像されます。有名人にまつわる諸情報、真実を知りたいという欲望が膨

張した。

政治家についてではないのですが、一例として、向坂逸郎の論説「石濱、大森、有澤、山田、平野」（『中央公論』1931年9月号）を見てみましょう。そのなかで向坂は、大森義太郎の論文における論争相手への「罵倒ぶり、毒舌ぶり」——これは当時の雑誌者には周知だったわけですが——、と対比するかたちで、本人の「将棋に勝つてエヘラヘラ喜ぶ」姿や、「安物の新奇な文具を買つて来ては、喜んでゐる」姿を描写しています。つまり、一般読者はテキストをとおして、日常の大森がいかに「毒気のない」人間かを追体験することができるといえます。いわば舞台裏話になっている。人物評論は基本的にこうした構造をとることになります。有名人の素顔を知りたいという読者の欲望に支えられるかたちで人物評論は流行しました。とするならば、私秘性の高い情報ほど商品価値は増大するわけで、その結果、ゴシップ記事との境界が融解する傾向にある。当時の雑誌誌面は六号記事欄がとても充実しており、各業界の動向や噂話で埋められるのですが、そうした人物評とも連動しながら機能していくことになります。

もう少し議論を広げておきましょう。この時期、雑誌界では「実話もの」や「講演会」記事も流行っていた。それから、拙稿「固有有名消費とメディア論的政治——文芸復興期の座談会」（『昭和文学研究』第58集、2009年3月）で触れましたが、「座談会」記事も同時期に流行した。それらはいずれも、有名人の生の姿にアクセスしたいという読者の欲望に支えられています。そうした読者の期待に応える誌面工夫が次々となされていった時期が1930年代前半でした。こうした背景を勘案するならば、人物評論という記述様式においては、「私」という位相はさほど重要ではないことになる。つまり、焦点は「誰が論じているか」ではなく、「誰が論じられているか」にある。くりかえしておけば、特定人物の情報を知りたいという読者の欲望に対応した記事であるのだから、当然ながら批評対象が前景化する。しいていえば、「彼／彼女」の前景化がおこる。とする、これは「私批評」とは対極にあるといわざるをえない。

前節と本節をふまえて、暫定的なまとめをしておくならば、次のような対比が描けます。すなわち、「私」が前景化する「私批評」と、「私」が後景化する「人物評論」。今回の研究集会のテーマにあわせていうならば、前者は一人称が前景化する。そして、後者は一人称が後景化し、あわせて三人称が前景化する。この対極の批評様式が当時のジャーナリズムの主流として同時に確認できる。しかしながら、事態はそう簡単ではありません。もう少し詳細に見ていきましょう。

4. 人物評論と私批評の交錯

先ほど人物評論の名手として馬場恒吾の名前をあげました。その馬場について、向坂逸郎「論壇月評【三】」（『東京朝日新聞』1932年7月3日朝刊）は次のように述べます。

馬場〔恒吾〕氏の人物評論は読んで面白い。[……] 馬場氏の評論の特徴の一は、取扱はれた人物の中に、馬場氏自らの希望が非常に濃く現はれることである様だ。今月の二つの評論は殊にさうだ。齋藤を、齋藤内閣の人々を、かくあらせたいといふ氏自身の希望が、齋藤といふ人になり、齋藤内閣の各大臣の性格といふものになる様に思ふ。だから、皆多かれ少なかれ自由主義的な性格として現はれてゐる。それは馬場氏自身の希望なのではないか？

馬場の人物評論の「面白」さは、対象人物の実態ではなく、書き手の「希望」に由来している。実際、ここで向坂が念頭においているであろう馬場恒吾「齋藤實論」（『中央公論』1932年7月号）は、以下のような論理展開になっています。「私は齋藤内閣に対して好意を有つ」。なぜなら、「独裁政治に対する防波堤」だから、というわけです。たしかに、これは馬場の「希望」的観測にすぎない。つまり、あきらかに「人物」を触媒として評者自身の意見を論じたもの

です。

また、石濱知行「論壇時評」（『中央公論』1931年3月号）は、次のように述べます。「政治家の進退離合などは、およそ面白くない。常々さう思つてゐる僕も、毎月どこかに出る馬場恒吾氏の人物評論だけは、いつも面白く拝見する」、と。石濱は論じられる人物ではなく、論じる人物の、その「論じ方」が面白いのだと表明しているわけです。となると、前節でまとめた「人物評論」の構造と矛盾が生じることになります。

もう少し別の角度からの例を見ておきましょう。尾崎士郎をめぐる人物評論特集について、批評された尾崎自身が「批評家と作家」（『文藝』1934年7月号）のなかで、こう感想を記しています。「自分のことを書かれてゐるよりも以上に書いてゐる人たちの人物と素質に触れることができた」、と。こういったかたちで、人物評論をする側の「人物」が前景化するという側面もあるわけです（ただし、これは批評された人間自身の感想なので、あまり良い例ではない）。批評対象ではなく、批評主体が関心の対象となる。この点で、一人称が後景化するという前節末尾のまとめはゆらいでしまいます。

さらに展開しておきます。川端康成は「人物論」（『文学界』1936年1月号）という短いコラムのなかで、「人物論は論ぜられる人のでなく論ずる人の自身の人物論に過ぎぬことが多い」と述べています。第2節で引いた小林秀雄の有名な言葉を援用するならば、究極的には人物評論も、特定人物を「ダシに使つて自己を語る」構造に回収されてしまうということがここでは語られています。ただしこれは、書き手の主観的意図は別にしての話です。

もうひとつ例をあげておきます。図版は、杉山平助が様々な媒体に書き散らした人物評論をまとめた本（杉山平助『人物論』改造社、1935年）の誌面広告です。そのレイアウトに注目したいのですが、文字データとしては、下段に「目次」があり、同書で取りあげられている人物の固有名がインデックスとして列挙されている。このかぎりでは、批評対象の有名性への欲望を重視した宣伝となっている。つまり、これを見て「〇〇〇が論じられているから買おう」

くりかえしますが、批評主体の主観的意図は別としても、消費構造としては、「人物評論」が「私批評」的に読まれてしまう、といったねじれが、ここに確認できるわけです。

以上をとおしてまとめておくならば、私批評は一人称が徹底して前景化し、人物評論は反対に一人称が後景化する。そのような批評様式であるかに見えた。しかしながら、人物評論は消費構造としては、場合によっては、一人称を前景化するかたちで受容されてしまう。このような構造を見てきました。そうした一人称回収構造のゆえに、小林秀雄的な批評系譜が文壇の主流となっていった、というその後の経緯を説明付けることも可能です。ただし、以下では、もう少し異なった視点から議論を開いておくかたちで発表を終えたいと思います。

5. 「私」回収構造への抵抗

2点ほど論点をあげておきます。1点目は、集団的批評についてです。大宅壮一は前掲の論説「人物論の構成」において、複数の人間が対象人物の「思想、経歴、性格、業績等を各自分業的に調べあげて、一つの総合的な人物論を完成する方法」を提案しています。以前から大宅自身、「綜合翻訳団」というグループを結成し、翻訳を分業体制化する試みを実践していたのですが（拙稿「脱神聖化する文学領域——大宅壮一の文壇ジャーナリズム論」『日本文学』2008年1月号）、その集団作業を批評にも導入しようというわけです。実際、『人物評論』誌上でくりかえし実践しています。創刊号に掲載された郷登之助「看板に偽りあり——藤村・有三・義三郎等の仮面を剥ぐ」などがそうです。この試みは、先ほど見た一人称回収構造への対抗的实践でもあったように読める。あるいは、より具体的には、小林秀雄型の私批評への対抗であったと読める。

もう1点は、匿名批評についてです。1930年代は文壇・論壇で匿名批評が流行った時期でもありました。そもそも、小林の私批評は1920年代に隆盛したプロレタリア文学批評に対抗する過程で出てきたのですが、そのプロ文が衰退したことにより、私批評の一人勝ちの状況が生まれます。そこで、空白になった

対抗軸を補填する現象として、匿名批評の流行があったと見ることもできるわけです。今回あげた人物評論の書き手たちはこぞって匿名批評にも従事しています。

これらはあくまで一例ですが、小林型の私批評に対抗する（／対抗しうる）ものとして、様々な試みが展開されていたことがうかがえます。批評史を捉えなおすにあたって、小林秀雄の系譜以外の批評様式を蘇生させ、一見無関係とも思えるそれら同時代の様式をつきあわせ、相対的な意味・位地を測定する作業が必要となります。そのために、本発表では「人称」という分析枠組の再設定を試みたわけですが、少なからず有効な枠組であることがあきらかになったのではないのでしょうか。

* 本稿は、当日の口頭発表の音声データを文字に起こした原稿に、最低限必要な削除・加筆修正を施したものである。

* また、本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

* 討議要旨

関礼子氏は、副題に「人称消費」という言葉を用いているが定義はどのようなものかと訊ね、それに対して発表者は、本発表では書き手の側の意識というよりも、読者、つまり消費する側における人称認識についてのアプローチを試みた。たとえば書き手が「私」の前景化を意図しなくとも、読者が勝手に「私」を想像して読みとってしまう受容構造が存在する。そこに着目することで、当時の読書空間のリアリティも見えてくるのではないかと考え議論を設定した、と答えた。

松村雄二氏は、明治期に黒岩涙香が政界の裏話を暴露することで政治家批判をし、最近では沢木耕太郎氏が新しい人物評論を出しているが、明治と現代との狭間に小林・大宅を置いた評論史の「見通し」があれば聞かせてほしい、と求めた。発表者は、明治後期から続く人物評論の転換点が1930年代にあった。そこには20年代後半の円本ブームに代表されるような出版大衆化状況が関係しており、明治との大きな違いは前提知識の共有の度合いにある。戦後から現代につながる対比に関しては、現在の雑誌の衰退を考えるに、誌面の思想内容よりも論者が誰なのかということに重点が置かれていることはあきらかだ。そうした傾向の始まりを遡及調査した結果、本発表の問題設定に行き当たった、と答えた。